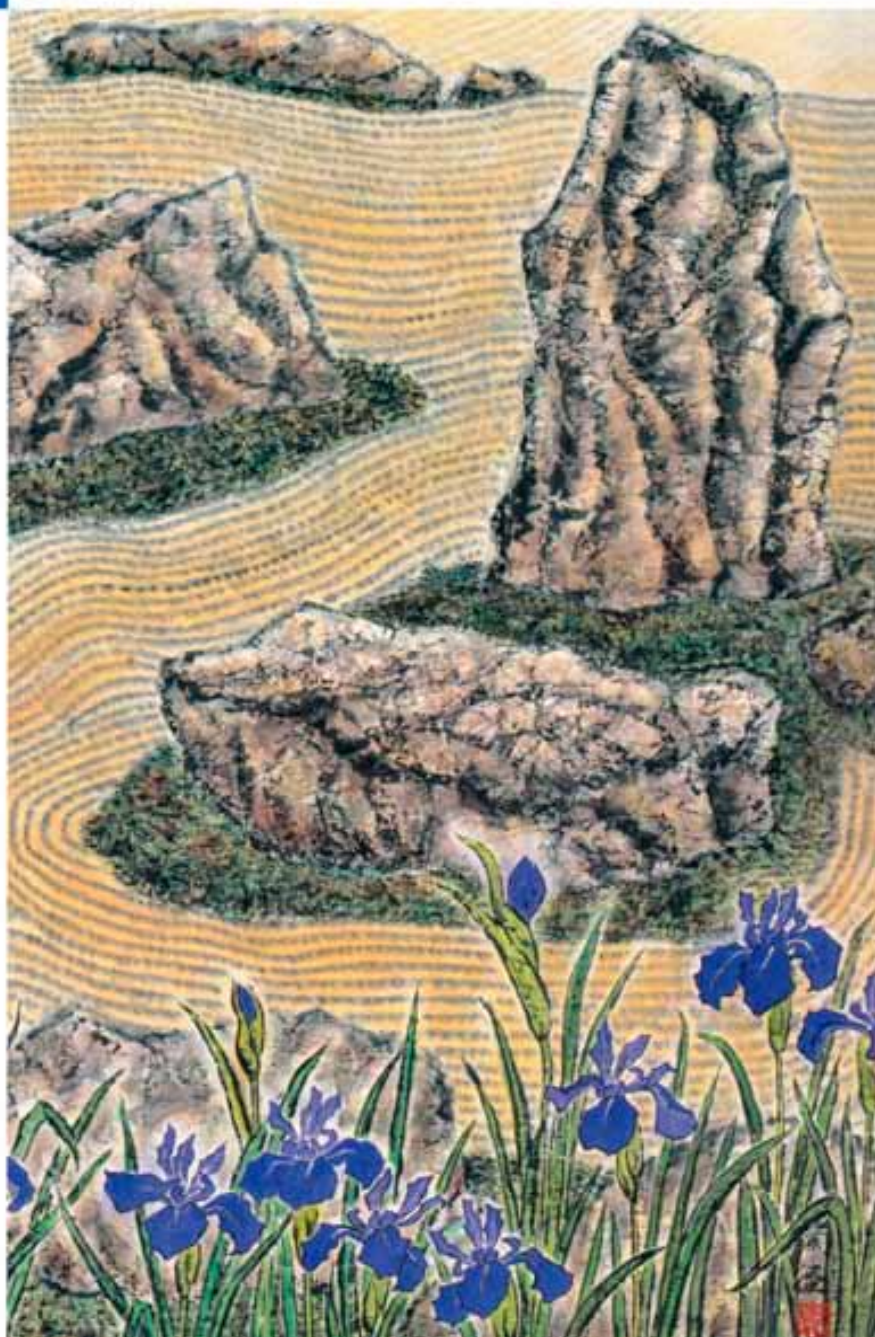


沖

7
2021

詩吟雑誌[2021]



裏文字

能村 研三

句集『神鵲』刊行

五月二十四日、登四郎の命日を発行日として句集『神鵲』を上梓した。『催花の雷』に続く第八句集で平成二十五年から六年間の作品三百五十八句を収めた。

昨年二月、三週間の糖尿病の教育入院の際、たいした治療項目がなかったので、病院で句集をまとめる作業に着手した。ほぼこの三週間近くの入院のあいだにこれまでの句を全部パソコンに打ち込むことが出来た。ちょうど入院中にコロナの感染が日本でも広がり始め、不安な日々が続いた。当初、その秋の「沖」の創刊五十周年の記念会までに作ろうという目標を立てていたが、句集原稿を自選していく内に、秋の記念大会の開催の有無が不透明になってきたこともあり、句集をまとめる作業を一時中断してしまった。

ようやく句集原稿をまとめて東京四季出版に持ち込んだものの、発行時期の目標が失われたこともあり、初校のまま時間を過ごすこととなった。

年が明け、ようやく初校、再校の作業を進め登四郎の命日を発行日にするべく出版社と打ち合わせを行った。

辛い東京四季出版の西井社長の計らいで装丁は間村俊一さんに担当していただいたことも望外の喜びであった。

間村さんは俳句も作る方で自らも句集を刊行されている。これまでに『新校本宮沢賢治全集』『新編中原中也全集』『塚本邦雄全集』などを装丁されている。句集の装丁では「攝津幸彦選集』『齋藤慎爾全句集』なども手掛けておられる方で、シンプルでありながらも存在感のある装丁である。

装丁のすばらしさはさて置き、句集の中身の方はいかなる評価があるかわからず、気になるところであるが、忙しい中、早速多くの方から反響をいただいていることは嬉しいことである。

倒れ苗よみがへらせる一雨あり

まくなぎや抱へ込みたる些事大事

能面は耳もたざりし青葉闇

六枚の雨戸走らす子供の日

海光や新玉葱の擬宝珠ぶり

莢透けて莢糸んどうの子沢山

雨粒のにはかに大き端午の日

昏れどきの川照つよし袋掛

裏文字の透ける聖書や薦紅葉

船底を灯すがごとく梅雨の部屋

能村 研三

土地改良で区画化された中に三反歩の田んぼがある。私は農業に素人なので、田植えと稲刈りは業者に頼み、自分は田植え前や稲刈り後にトラクターで土をかき回し、田んぼに稲がある時は、畦の草刈りと水の管理である。

今はまさに青田である。毎日水の見回りに行つては、盗まれた水を盗むという繰り返し、半ば散歩気分でもある。登四郎先生に「青田路それで身に湧く風をきく」という句がある。確かに青田の中に立っていると風が心地良い。青田から湧く風もあれば、青あらしをばらんで田に分け入つて来る風もある。日や雲の翳り具合によっては田表が暗くなり、背後からグライダーが着陸して来るような青田波を発生させてくれる。

今朝は田んぼに青鷺の番がいて、片方は優雅に舞っていた。これからも白鷺が来たり、鴨の親子が来る青田である。

国浮けり関東平野に田水張り
薄暑光漁港の昼のがらんだう
水切りの石新緑を畳みゆく
葉隠れの尻青梅の知恵盛り
大瑠璃の声みづうみを磨きをり
逆さまに慣れてバケツの初鯉
万緑へグリコの男飛び出せり

蒼茫集

いつの間に

栗原 公子

緑の夜たし算をして貼る切手
いつの間に子ら遠くなる潮干狩
雨音に聴し花種蒔きし夜は
*オルガンの低音ひびく復活祭
香木の店に琴の音花ぐもり
その昔海なりし街かぎろへり

賢しら言葉

埴誠 一郎

*人流とふ賢しら言葉卯波立つ
陽炎を反芻しつっ牛歩む
逢魔が時沈丁の香のいや増しぬ
牛飼ひの左千夫生家や蜂の飛ぶ
いくつかは風に任せて花種蒔く

母 港

千田百里

行く春の雲を突ついてゐる六三四
なほ深く「考える人」春の雨
*滝壺の石のまばゆき群青忌
豪華客船母港に休む聖五月
めまとひの乱舞談合坂あたり
父母遠しメーデー遠し爪を切る

王 子

辻美奈子

*涼しけれ王子を乗せぬ白馬こそ
椎の花神木にして人くさし
筍をさぐるや深きより応へ
長身ですこし猫背で粽結ふ
蛙子の憂鬱は身をうらがへす
ついと来て植田の水を見て帰る

切 株

能美昌二郎

風光る仏師の鑿の気迫かな
*切株に残る温もり花疲れ
初蝶のけふはどの花宿とせむ
地図の上指は旅する日永かな
折癖のなき教科書や桜草
菜の花や牛舎の明りほのとして

蕨 山

大畑善昭

行者萌踏みつけてをり匂ひけり
*誘はれず誘はず夢に蕨山
墓回向夏鶯もゐてくれ
岩つばめ日が沈みしは今し方
錫杖のしやらんしやらんと山開き
青葉闇コロナウイルスまた化けて

潮鳴集

自 在 富川明子

初志にある一本の棒みどりさす
行く春へ信樂たぬき片手あぐ
滴りの磨崖月日を青青と
身丈てふ自在を舞へり五月鯉
咲き継げぬ水中花さきつづけぬる

バリトン 井原美鳥

春行かす鯛の一さく昆布で締め
* 声あらばバリトン泰山木の花
やや降れど風よし竹植う日なりけり
茅花流しシートノックのこ糸のせて
蚊遣豚猫の一瞥くらひけり

黄 沙 栗坪和子

* 追憶のやうに黄沙の降りしきる
花あんず閉め忘れたる蔵扉
夢違 観音来ませ鶴帰る
董咲く山羊のさびしき足拍子
大漁旗轟々と鳴り夏祭

春深かむ 中村重幸

花渡る津軽海峡蝦夷燃ゆる
捨てきしこと忘れきしこと春深む
* 槍投げて宙を切る音風光る
ざぶとんの小ぶりもよけれ花の茶屋
糸柳水は空より早く暮れ

五月来る 川高郷之助

* 五月来る何をするにも腕捲り
オムライスの真ん中崩し子供の日
物語 染みし一着更衣
長男にのこる童顔サングラス
振り向くやこの香水に覚えあり

衣 紋 七田文子

にはたづみ跳んでみようか春の雲
船の水脈船の横切りうららけし
* 継橋の人つぎ世継ぎ花は葉に
すずめ蜂見てより五感鋭くなりぬ
観音の衣紋さ揺らぐ新樹光

可動堰 森村江風

薰風へ部屋の隅まで明け渡す
* 村いくつ市の名に吞まれ麦の秋
走り梅雨明治浮き出る赤煉瓦
頑な手職住む路地額の花
可動堰潮香が跨ぎ梅雨兆す

黄の花 小林陽子

潮吹貝もどす彼の世の差潮へ
灯台の白立ち上げて五月来る
夏めくや寿司飯台の箔の艶
* 子つばめの口は黄の花巣にひらく
空蝉の透きとほりたる羽化月夜

平らかな水 道端 齊

* 平らかな水を切り分け田水張る
さらさらと光を廻し竹落葉
若葉てふ壊れさうなる季節かな
釣船の水脈の重なり夏始
深層を知らずに生きて水馬

夢二の絵 平松うさぎ

檜皮打つ竹釘口に風薫る
木洩れ日のトレモロ淡し若葉風
瑠璃色の缶のクッキー抱卵期
* 苧環や随の長き夢二の絵
火をくぐりきし白磁壺涼しかり

沖作品



能村研三選

春霞野面まばゆき陽が昇る

千葉

鈴木 和江

* 落款は鳥の足跡畦を塗る
どかと置く色のかたまりつつじ咲く

余り苗水の取り口囲みけり
一条の滝を奉りて香絶えず
巡行はせずも大山車組む矜持

石川

坂下 成紘

* 一月をかけて組む山車解く一日
きつぱりと旅は諦め粽蒸す
細枝を鷺啗へ行く立夏かな

熊本

河寄 祐二

* 十戒の海の壁立つ大干潟
春暁や霊峰となる郷の山
春昼の暗き庇を出棹す
万象は膨らみの相葉ゆる

一刻の雨に潤みて山椒の芽
花冷えの駅の待合わずれ傘
挿木して朝な夕なに見遣りをり

千葉

浜崎喜美子

花アカシア無人の駅の影法師
夕立雲出すを躊躇ふ手紙あり

* 初蝶 来性善説の色纏ひ
木造りの猪口を満たして木の芽和

市川市

澤田 英紀

花は葉に什の捉を諳ずる

青田風起こす一輛電車かな

* 緑蔭を駆くる風あり車夫のあり

* 天に香を捧げみるかな朴の花

千葉

牛島 晃江

それだけの事が好日柳絮飛ぶ
幽玄の小暗さを舞ふ竹落葉
永き日の川はゑくぼの渦を巻き
群青の沖のうねりや夕永し

人形にふつと怖さを瞳の夜

水谷 昭代

* 涅槃像真似して眠る万愚節
その後の消息知らずさくら冷
切株のさくらに発心芽吹きたり
半世紀の免許返上青き踏む

神奈川

加賀 莊介

* 真珠抱く貝蕩揺と春の潮
鳩笛買ふ津軽に春を惜しみけり
バトントワラー白き腕上げ風光る
白魚へ歯牙持つ性をかなしめり

福岡

伊藤 照枝

* 整列の出迎へ赤の鬱金香
ふはふはと牡丹膨らむ日和かな
石垣へ花吹雪なる下城かな
花吹雪一片空へ昇りたる

栃木

五十畑悦雄

* 堰落つる水のきららか五月来る
みどり児の無垢の明るさ緑さす
新緑に溶け込む一步ためらひぬ
むずがゆき空麦秋の匂ひ立つ
内宮の千木のあざやか新樹光

夏海離すもんか父の腕

静岡

佐藤 真哉

新緑のまど図書館の午後静か
田水張り鏡の空や十重二十重
* 暁闇に微光の溶けて燕飛ぶ
* 清明や山毛櫨の木のぼる水の音

千葉

里村 梨邨

しののめの窓打つ雨や花木五倍子
白牡丹重たき弱を揺らしをり
柳絮飛ぶ人なき街の無重力
コロナ禍を圧して入籍みどり立つ

愛知

鳥居 公子

かはほりや逢魔が時の無音界
陵の空を制して楠若葉
* 泊灯や汐の揉み合ふ走り梅雨
余生とて弾むものあり春めく日

青森

秋谷美智子

白魚のどれにも水の重さあり
陸奥湾の島を数へて春惜しむ
青田なか汽笛ならして「メロス号」
鳥帰る帰る国なき民の群れ
良性と医師に告げられ春の宵
現世も来世も厳し蝌蚪生る
三陸の鷗飛び交ふ青葉潮

工藤 邦子

飛鷹選評



能村 研三

落款は鳥の足跡畦を塗る

鈴木 和江

田植を前にして、水が洩れないように畦を鍬でしっかりと塗り固められる。塗り固めた畦は美しく照り輝く。そんな整然と塗られた畦にどこからか鳥がやってきて足跡をつけていった。その足跡は芸術的で、大きな紙に押された落款のようであった。面白い比喩の句である。

一月をかけて組む山車解く一日

坂下 成紘

坂下さんは能登の七尾市の方。七尾市で開かれる「青柏祭」は「でか山」と呼ばれる山車がまちを練り歩くことで知られている。その組み立ては骨組みにむしろを張り、大幕を張るための滑車をつけるなどひと月の時間がかかる。しかし解くのは一日で終わってしまう。それでも厭うことなく祭を守る人たちの心意気はすばらしい。

十戒の海の壁立つ大干潟

河寄 祐二

河寄さんは熊本県の方。近くには干満の差が激しい有明海がある。最も潮が引く時は、遠くの沖

合まで大干潟が広がる。干潮時の夕暮れ時には、この砂紋が鮮やかな夕日に照らされ、輝き出す。これは昔映画で見た「十戒」の、モーゼが出てきて海に壁が立つシーンにも似ているように思えた。

夕立雲出すを躊躇ふ手紙あり

浜崎喜美子

手紙を書いたもののポストに投函するか否かを躊躇うことがある。恋文なのであろうか。今のようなメールで気軽にやりとりする時代だと考えにくいことだが、ポストの前を行ったり来たりしたことが思いだされる。夕立雲がたちこめてきて、結局手紙は投函されたのであろうか。

緑蔭を駆くる風あり車夫のあり

澤田 英紀

浅草など観光地に最近増えてきた人力車の車夫は、若いバイトなどのイケメンも多くて、人気がある。股引き、腹掛けという粋な服装で緑蔭を颯爽と駆け抜ける姿は見ているだけでも気持ちが良い。「風あり」「車夫のあり」のレフレインが一層軽やかさを演出した。

天に香を捧げゐるかな朴の花

牛島 晃江

朴の木は我が家の家木なので、日毎に観察が出来る。大きな木で、二階の屋根を越えるような樹高で、てっぺんに咲いた花は強い芳香を天に捧げているようでもある。

涅槃像真似して眠る万愚節

水谷 昭代

涅槃像は「頭北首面向西方」という入滅の相にしたがって作られている。横向きに寝た姿がこの形に似ていたが、これも万愚節ゆえの遊び心であった。